

高校生 最優秀賞

ほっちゃんに教えてくれたこと

関西創価高等学校

三年

嶽野

直美

ダウン症を持つ人との初めての出会いは、私が中学生の時でした。名前はほっちゃん。身長は皆より小さく、言葉は上手く話せないけれど愛らしい笑顔が素敵で可愛い女の子でした。そんなほっちゃんと私は中学三年生の時に同じクラスになり、中学校生活最後の大切な一年を同じ教室で過ごしました。ほっちゃんには言葉は上手く話せないですが、怒ったり喜んだりという自分の気持ちを顔の表情やしぐさで私たちに伝えてくれました。人懐っこい性格のほっちゃんはクラスの誰に対しても積極的に、そのためか皆から人気者でした。普段、ほっちゃんが「かがやき」という特別支援学級に通うお手伝いや、休み時間に一緒に遊んだりすることによってだんだんと仲良くなり、ほっちゃんと過ごす時間が増えていきました。

そうしてほっちゃんと一緒に毎日を過ごすうちに卒業の時を迎え、卒業後に仲の良かった友人七人とほっちゃんと一緒に卒業記念に出かけた時のことです。出かけた先でほっちゃんと一緒に歩いていると、目の前で泣いていた小さな男の子にほっちゃんがかけよろうとしました。するとほっちゃんを見たその男の子の母親が急に血相を変えて

「うちの子に近づかないで！」

と強い冷たい口調で言いそのまま逃げるように去っていきました。また、ほっちゃんの姿を見た通りすがりの男子高校生グループが

「うわ、ガイジやん」

「きつたな」

などと言っていたのを耳にしました。それらを聞いた私は、なぜ障がいを持つ人を馬鹿にするような言葉をごく普通に口にできるのか、障がいを持つ人だって自分達と同じ人間であるのに、どうしてそんな行動がとれるのか、と怒りでいっぱいになり、同時にこれが現実

なのかとショックを受けました。障がいをもつ人への「差別」「偏見」を実際の社会で目のあたりにした瞬間でした。

現在の社会でも、障がいを持つ人への「差別」や「偏見」はまだまだたくさん存在していると思います。少しでも社会からそういつた偏った見方を無くしていくためには、やはり一人一人の理解と思いやる心が必要なのではないかと思えます。世の中には身体が不自由であったり外見だけでは分からない障がいを抱えている人がたくさんいます。私の祖母も実は障がいを抱えており、祖父は心臓が弱く、祖母は幼い時にかかった小児ポリオの影響で足が不自由です。障がいを持ちながらも毎日を懸命に生きる人たちの姿を、もつとたくさんの人々がよく知り、誤った考えを改めるべきではないかと私は思います。

ほっちゃんとの関わりの中で、私はたくさんのことを学び、自らの考えを深めることができました。また、ほっちゃんという一人の

友人に出会えたことで、他人についてよく考
え行動することの大切さを学ぶことができま
した。今はとても元気な人でも、自分を含め
いつ障がいを抱えて生きていくことになるの
かという予想は全く分からないことであるし
ずっと健康でいられるという保障はどこにも
ありません。だからこそ、国民一人一人がも
つと障がいについて理解し学んでいくことが
大切だと思います。障がいを持つ人も持たな
い人も、毎日を明るく過ごせていけるような
社会になることを願い、私自身も何かでき
ることを少しずつ始めていきます。